我が子へ

あなたがいつどこで生まれたのか私は知りません。あなたの名前も知りません。でも私はあなたを我が子と呼びます。それはあなたが果てしなく厳し理想社会への道を進むことを選んだからです。

あなたはまだ気づいていないかもしれませんが、この道を選んだ者は形而上工学者なのですよ。人を社会的災害から守る形而上的構造を作る仕事です。それは頑丈な建物を作って雷や嵐といった自然災害から人を守ることを仕事

とする工学と対をなすものです。頑丈な建物を一人で作ることはできません。たくさんの人が協力して災害から身を守れる建物を作ることができます。形而上工学も同じです。たくさんの人が協力して、頑丈な社会構造を構築し、そこに入ることによって自分たちを守ることができるようにするのです。このような構造を設計し構築するのが私たちの仕事です。

人類史上多くの文明がこの問題に取組んでは失敗してきました。地球上では自然状態では弱肉強食の世界で、強いものだけが生き残れます。そこで、動物はすべて自己保存の本能を備えています。人間社会も例外ではありませ

ん。しかし皮肉なことに、そんな社会ではそれぞれが自分を守ろうとすることが、かえって周りの環境を生存にとって危険なものにしてしまい、いわゆる万人の万人による闘争状態を生み出してしまいます。そこで人間はその自然状態から脱するべく理想社会の建設に乗り出したのです。そこでは、すべての人が全体の利益のために自己を犠牲にすることをためらうことがありません。そしてそのことが周りの環境を安全にし、自分の身の安全も守られるようになるのです。そしてそこでは有能な指導者が自己を捨て、全員のためになる決定を下し、自分を犠牲にしてまで人々を守ることになっています。

でも、そんな社会はまだ実現できていません。その一番の問題はやはり自己保存のための強烈な動物的本能を克服しきれなかったことにあるでしょう。さらに、有能で善良な指導者の確保の問題もありました。いくら皆が自分を捨て社会に貢献することを受け入れても、指導者に能力がなければ社会は崩壊してしまいます。また指導者が善良でなければ、委ねられた権力を私利私欲のために悪用することになります。理想社会の建設を試みた文明はこれらの問題を克服できず、崩壊して自然状態に戻るという周期を繰り返しています。形而上工学の究極の目的はこれらの問題を克服し、理想社会を建設する

ことなのです。

人類はまだまだ未熟で、形而上工学という分野は未発達です。ヨハン・セバスチャン・バッハはゴルトベルク変奏曲で、この分野の発達の過程を示唆しています。文明は興亡を繰り返し、そのたびに少しづつ精神界をつかさどる形而上の領域が広がり、十周目に遂に理想社会の建設に成功するだろうと告げているのです。私の時代の人類は一周めか二周めの文明に差し掛かっていますが、今のところ一つの文明が一周するのに二千年から三千年かかっているので、形而上工学が理想社会を完成させるには二万年から三万年かかる

ということになるでしょうか。

このことが通常の工学と比較してあなたの職務を著しく困難なものにしています。肉体と精神には釣り合いがあります。百年生きる肉体にはそれに呼応した精神が宿ります。だから私たちは一分を短いと思い十年を長いと感じるのです。そんな精神の枠組みで二万年、三万年というプロジェクトに携わらなければいけないことに対する重荷は相当なものです。辛くて当たり前なのです。

例えば建築家が高層ビルの建築を試みる場合を考えてみましょう。その高

さに耐えうる強度を得るためにはまず地面を掘ってしっかりした土台を作らなければなりません。これには何年もかかります。それでも合計五年とか十年単位でこのプロジェクトを完成することができます。だから建築家として、土台ができた後の鉄骨の配置や、空調、配線から防火設備に至るまで配慮しておくことが必要です。でも形而上工学ではこの数年の土台作りが数千年かかるわけですから、縮図にすると、五年かかるプロジェクトに対して自分の寿命が二日か三日しかないのと同じということになるのです。ですから普通の感覚のままで仕事をすると圧倒されてしまうのです。

私もこの感覚のずれに苦しみました。私が生きた時代は文明凋落の初期で人民が過酷な人権侵害を被った時代の反動で自由と権利が過度に強調された民主社会でした。そんな中で民主社会の劣化やその他の問題を協力して解決しようと理想主義の教義をどんなに誠実に訴えても協力してくれる人はいませんでした。最後にはそんな人々に対して私は守るべき対象である彼らを憎まなければならない状況に陥り苦しみました。許そうとしたり忘れようとしたり努力しましたが、不可能だったのです。

また、自分の職務が何かを見極めるのも難しかったのです。私は誰も読ま

ないであろうことを覚悟のうえで、形而上工学の基盤を作るための本を書き上げました。それでも書き上げたとき、これを世間に知らせることも私の役目なのではないかと思い、伝道活動を試みましたが、それが一人でも聞いてくれる人がいる限り続けるべきだという義務感からしていることなのか、それとも自分の名誉欲からしていることなのか見極めることができず、続けるべきなのかどうかわからなくなってしまいました。社会は私にそんな機会は与えてくれなかったので、私はどんどん辺境に追いやられ、最後には全く無駄な抵抗のようにも見えてきました。でもここで終わっていいという確証が

ありませんでした。これももう辛い職務を途中で放棄したいという自分の欲求からなのか、本当に職務を全うしたのか判断がつかなかったのです。

私をそんな状況から救い出してくれたのは『神』の存在でした。ここで私が神と感じたのは、私たちよりずっと長く、私たちが永遠と知覚する年月を生きる存在が持つであろう意識のことでした。その意識にとっては百年や二百年は私たちの数分あるいは数秒にも満たないくらいに感じられるのかもしれない。この神は私たちの見ることのできない何万年もかかるプロジェクトの全容を見ることができるので、すべてをその判断に委ねて、それぞれどの

時期に何を行うかに基づいて適切な人材を派遣してもらい、一人一人が自分の果たすべき役割を誠実に果たしていけばいいのだと悟りました。

そのことを真に理解できたとき、遂に自分の迷いが振り切れました。私はまだ地盤作りをしなければいけないときに、配線や空調の心配に心を砕き、助けてほしいと思っていたのですが、それは私に与えられた責務ではないので、何をやっても順調に進むわけもなく、この時期にはそれらに携わるべき人も着任していないので、助けが得られるはずもなかったのです。

でもこのことは頭ではずっと前から理解できていました。私の本でも何度

も論じてきました。それでもこの苦悩を消し去ることはできませんでした。つまりこのような遠大な視点があるということは理解できても、実際その視点に沿って行動することは簡単なことではありませんでした。それができるようになったのは神を論じることから神を感じることに変わった時でした。

神を論じることは簡単です。たとえばゴルトベルク変奏曲はヨハン・セバスチャン・バッハによって一七四一年に出版されたアリアと三十の変奏曲であるということは頭では一瞬で理解することができますが、これを実際演奏するためには何年も何十年も苦しい鍛錬を積む必要があります。神を論じる

ことと神を感じることにはこれと同じ違いがあります。

神を感じられるようになるまでには近道はありません。私たちの文明は物理界においては錬金術と科学の区別をつけることに成功しましたが、それが精神界においてはまだできていません。ですからその道を歩み出すに際してまず心に留めておかなければならないのは、神を名乗る偽偶像の存在です。それらは神と名乗ることであなたの忠誠心を得ようとします。しかしそれらが狙っているのは権力か富であり、理想主義の教義とは相容れないものです。あなた方はまずそれらを見抜くことが必要です。それには三つの注意点があ

ります。まず、あなたの持っている理想主義に貢献したいという強い志は素晴らしいものですが、決してその志を悪の破壊に向けてはいけません。すべての力を善の構築にささげるのです。さもなければ進むべき道を誤って悪同士の破壊の渦に巻き込まれてしまいます。

次に、理想社会の構築は形而上の領域であって、金銭などの物質的領域とは全く別物で、元来何の関係も持つべきではないものです。ただ、人は一人では心細く、また何か目に見えるものに頼りたいと思う気持ちがあり、そこで信者どうしが集まれる教会のような建物を建てたり、司祭のように導いて

くれる存在を求めたりします。そうすると、最低限建設費用や司祭の生活費などといった金銭が必要となってくる場合はあります。しかしそれが重要な目的となることはありません。神がそのような奉納を求めてくるなどということもあり得ません。キリスト教でカトリックに対し、新教徒が神とつながるには聖書だけでよいと唱えたのは、この点を示していますね。

最後に一番大切なことは、神の存在意義を取り違えないことです。神は私たちが理想社会を築くにあたって、その全貌をみて私たち一人一人が果たすべき役割を示してくれるためにあるのであって、自分の欲しいものをねだっ

たり、苦しみから解放してくれるように願ったりするべき対象ではないのです。そのことを取り違えると、悪に付け入るスキを与えてしまいます。それらはお金を払ったり、権力の座につけてくれたら願いをかなえてやるなどと言ってくるのです。純正の宗教でも他力本願の概念が入り込みだしたときは凋落の兆しと見ていいでしょう。

神を感じるようになるために、人は歩み続けなければなりません。理想主義を捨てない限り、その道は自然と見えてくるはずです。でも私は平坦で明るく広い道を進むことは許されませんでした。そちらに進もうとどんなに努

力しても、あたかも「運命のはさみ」とでもいうものが、つながるべき糸をプツンと切ってしまうかのように、それがどこにも発展して行きませんでした。そしていつもその隣にあった暗くて細い道を進むよう強いられました。それは道と呼んでいいかどうかもわからない、少し進むと無くなってしまいそうな道で、そちらに進むくらいならむしろここで立ち止まっていた方がいいという自分を必死で説得して進まなければなりませんでした。

でも不思議なことにそちらの方に進みだすと、一つの努力が次につながって二つ三つさらにやることができ、それを続けていくうちに道がだんだん大

きくしっかりしてきて、私が与えられた責務を果たすために必要なものは、ちょっとした奇跡でもあるかのように不思議と現れて何の苦もなく手に入るようになりました。そして気が付いてみると不可能と思えた書籍を完成することができていました。

一時は試されたのかなと思ったこともありましたが、振り返ってみると文明凋落期の理想主義者にとっては厳しい環境の中、責務を追求するために唯一と言ってもいい道が極めて慎重に選ばれていたことに気づきました。また広く明るく見えた道もずっと後になってみるとそれが破滅につながっていた

ことがわかりました。ですから今思うとたかが二十～三十年先さえ見通すことのできない盲目の私は守られ導かれていたのだと思います。その時私は神を感じるようになったのです。

神を感じられるようになると、神が見ている全体像を完全に信頼することができるようになります。これが全体像の全く見えない微小な一部分が全体を把握し個々の部分がどのような役割を果たすかを理解することができる唯一の方法です。そうすると、たとえ自分の生存中には何の結果が見られなくても自分の与えられている微々たる役割に安心して取り組むことができるよ

うになるのです。この絶対的信頼感によって湧きあがる不安や疑念が取り去られるのです。そしてこの神の意志への絶対的信頼感が形而上工学を可能にするのです。

形而上工学の概要もせっかくまとめたのだから世に広めた方がいいのではないかといった私の最後の葛藤もまた「運命のはさみ」によって全くどこにもつながりませんでした。でも考えてみると今文明が秋の終わりから冬に向かっていく中、無理して世に出そうとするのは冬に芽を出す植物のようなもので、出たとしてもすぐに険しい環境によって枯らされてしまうのかもしれ

ません。秋の終わりに植えられた種は土の中で冬を越して春を待つのです。私は形而上のエンジニアリングを人が逐一干渉しなければいけない人工的なものと見ていましたが、神のエンジニアリングはもっと自然に近く、植物の種のようにあらかじめプログラムされていて、干渉されることなく各々がそれに沿って動いていくものなのかもしれないと思うようにもなりました。形而上工学もその時期が来た時には自然と芽を出してくれるでしょう。もしあなたが春の時代に生まれて形而上工学の芽が出てきたら水や肥料を与えて大切に育ててください。

この過程は辛いものだと思いますが、地図があると旅が楽になるように、心にとどめておくと、少し楽になるかもしれません。少しでもあなたの役に立てればと思い、ここに記しておきました。

それでも、特にあなたが不可能と言える状況下で理想主義の使命を遂行し、究極の犠牲を払うことになってしまったら、とても複雑な強い思いが込み上げてきます。もしあなたが私の血を分けた子供であったなら、自己愛が勝ってしまっていて、あなたを失いたくない、どうして私の子供なの、他の人の

子供であってほしいという気持ちになっていたかもしれません。肉体的存在に限定される愛とは過酷なものですね。共に過ごすことが基準となっているので、失わざるを得ず、失ったときの痛みは言葉に尽くせないものがあるでしょう。

会うことのかなわない時空を超えて存在する理想主義者の愛は失われることはありません。もちろん特別な場合に、ごくまれに共に時間を過ごすことのできることもありますが、それが終わっても、通常の状態に戻るだけのことで、理想主義を捨てない限り肉体的存在を超えて愛は続きます。そしてこ

の愛こそが私たちを他の動物と根本的に異なるものにしているのです。私たちの他に何百年も隔てた会ったこともない者に愛を感じる能力のある生物は地球上に存在しません。そしてこの愛こそが私たちが動物の世界を支配する弱肉強食の法を免れ、理想社会を築くための礎となるのです。

ただ母としては、あなたがどれだけ苦しむことになるかを考え、心が痛みます。そばにいて守ってあげることも慰めてあげることもできないもどかしさと、そのような状況にあなたを置いた自分への腹立たしさです。今私がやっておかなければ、あなたがしなければならなくなり、弱肉強食の状態がさ

らに進んだ時代では、私が払わなければならなかった犠牲の何倍もの犠牲をあなたが払わなければならなくなると思い努めてきましたが、大きな流れに一人で立ち向かうことはできず、結局あなたが大きな犠牲を払わなくてもいいような土台を作ってあげられなかった自分が不甲斐なく、悔しくて仕方ありません。

さらに神の愛を感じたとき、また別の感情が湧きあがります。

神が二～三万年かけて人による理想社会を作ろうとしている理由は何なのだろうと考えるのですが、そもそも神というのは私たちの百年が一億年くらい

に当たるような意識を持っているのでしょうか、それとも十億、百億年にもあたるようなレベルの意識を持っているのでしょうか？いずれにしても、そのような高い意識が既に存在するのに、私たちのような意識のレベルの精神界を作ろうとする意図はどこにあるのでしょうか？もしかしたら神は理想社会を作り上げた後、それを物質界と融合させて、さらに高いレベルの存在を作り上げようとしているのかもしれません。それならば、愛を持って私たちの存在を神に近いところまで育て引き上げようとしてくださっているのでしょうか。だとすると神が干渉しなくてもよい理想社会を私たちに作らせるこ

とによって、次の段階をあらかじめプログラムしているのかもしれません。

そんな神の思いに対して、苦しみから解放してほしい願うことはどうなのでしょう。全能の神のことです、私たちの苦しみを取り除くことなど簡単にできるはずです。でもそうするためには、私たちから意識を取り上げ、無機的な部品として扱わなければならなくなるのではないかしら。苦しみだけを取り除いて、喜びは残しておいてくれというのはさすがに無理な相談でしょう。ここに神の苦悩が感じられます。それはあたかも挫折するとわかっていながら見守るしかない親のように、もどかしいものではないでしょうか。

その苦悶を感じたとき、私はそれに答えなければと思いました。今まで私は自分の意志はお荷物だと感じてきました。苦しい思いばかりして、いっそ意思などなく機械的に職務を遂行できたらどんなに楽だろうと考えてもいました。でも、実はそれは神からの贈り物で、私は子供を育てるように、この弱い意思を慈しみ、鍛えていかねばならないのだと悟りました。私は守るべき人を憎むようになり苦しみましたが、それは私が自分の弱い意思を疎ましいと感じていたのと同じ感情だと思うようになりました。自分がこの意思を慈しむことができれば、同じように、弱い人たちを慈しむことができるよう

になるのだと思うようになりました。

そう悟った時、私たちは教義の範囲内で自由意志を持つに値することを証明し、この与えられた機会を無駄にしないために何としても自分たちの力で理想社会を作り上げなければならないという決意が湧いてきたのです。

そう決意した時、あなたへの思いは、私たちのために重要な責務を与えられたあなたに対する誇りと、そこまで厚い神の信任を得たあなたを羨ましく思う気持ちと、自分が払ったあなたに比べるとずっと小さな犠牲を嘆いていた自分を恥ずかしいと思い、だからあなたの母と呼ばれるにふさわしい強い

人になろうとする気持ちが入り混じったものになりました。

母として、それだけ神の厚い信任を得ているあなたのことですから与えられた責務を全力で果たされることに疑いはありません。それでも、与えられた苦難に勇敢に立ち向かいなさいとは言えません。ただ任務の遂行に際してどんなにその過酷な運命を嘆いても、恨んでも、泣き叫んでも、それは決して恥じるべきことではなく、私のあなたに対する愛情と敬意は決して一寸たりとも減ることはないことを深く心に刻んでおいてほしいとだけ言わせてください。

我が子よ。この道はとても果てしなく辛い道です。あなたはこの道を一人で歩んでいかなければならないかもしれない。誰かが共に歩んでくれることを切に願います。でも、たとえ独りぼっちに思えても、決してあなたは一人ではありません。今あなたの歩いている道をかつて歩いた人は血族でなくてもみんなあなたの心族の父であり母であり、あなたと共に在ります。寂しく思ったらバッハの音楽の中を探してみてください。ゴルトベルク変奏曲の中を探してみてください。そこに私たちを感じることができるはずです。理想主義者のコミュニティはそこに実存しているのです。

そしてそこから私たちはあなたにメッセージを流し続けましょう。あたかもワインボトルを海に流すかのように。

母より

二〇二三年三月